

定年退職される教授



医学部泌尿器科学講座

教授 藤岡知昭

本学医学部泌尿器科学講座、藤岡知昭教授は平成二十六年三月三十一日をもって定年退職されることとなりました。

藤岡先生は、昭和四十九年三月に本学医学部をご卒業後、同年四月より聖路加国際病院において泌尿器科研修医・医師として実地修練を積み、五十五年十月よりは米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCCLA)の泌尿器科研究員として、一年間、腫瘍免疫学の研究に勤しまれました。帰国後は福島労災病院に泌尿器科医長として赴任され、手術技術や透析医療の習得にも努められ、聖路加国際病院時代と合わせ泌尿器科領域手術のほとんどをご経験されたと伺っております。そして、ご留学中に着手された腫瘍学研究を続けられる環境を求め、故吉田昌男前細菌学講座教授の薦めにより、五十九年一月に故大堀勉前岩手医科大学理事長が当時教授であられました本泌尿器科学講座に戻られました。その後、六十二年一月に講師、平成元年四月に

は久保隆前教授のご推挙により助教となられ、平成八年四月に第三代教授にご昇任されて現在に至っております。

先生は、ご着任早々ご専門の腫瘍免疫学研究を本講座に新たに導入され、これが今日の本講座における研究活動の大きな礎となっております。多忙な日常診療の合間に、全国の基礎研究者と交流を重ねつつ、専用の腫瘍免疫研究室(537号室)で先生自らクリーベンチンに向かわれました。当初は、各種細菌と実験腫瘍との抗原交叉反応性による抗腫瘍効果についての研究を手掛けられ、昭和六十年十月にご自身の医学博士を取得されました。同時に研究員の育成にも直接指導されつつ、癌免疫療法用細菌製剤OK-432の内因性サイトカインの誘導能、リンフォカイン活性化傷害細胞(LAK)や腫瘍浸潤リンパ球(CTL)とインターロイキン2を併用した腎臓に対する養子免疫療法、同種血輸血が癌宿主リンパ球のサイトカイン感受性へ与える影響などへと研究規模を広げられました。

加えて、本学生化学講座との共同研究で開始された活性型ビタミンD3の腎細胞癌に対する抗腫瘍活性の研究は、血管新生活性介在や細胞間コミュニケーションの増強などの解明へと進み、近年のCYP27B1遺伝子群の発現解析研究へと脈々と引き継がれております。このがん遺伝子発現解明へのご意欲は、現在シカゴ大学教授の中村祐輔先生が主謀されていた東京大学医学部研究所ヒトゲノム解析センターとの共同研究への参画で益々高められ、A型腎炎や糖尿病性腎症の一塩基多型(SNP)解析を皮切りに、国内初の膀胱癌に対するCDNAマイクロアレイ解析による抗癌剤感受性予測システムの確立などへと結び付きました。これらの成果により日本泌尿器科学会賞をはじめ国内外の学術賞がもたらされ、本講座のさらなる飛躍の一翼を担っております。近年では、各泌尿器がんにおける新規ペプチドワクチン療法の開発と医師主導型臨床試験(トランスレーショナルリサーチ)や遺伝子多型ゲノムワイド関連解析による発がんや治療有用性・有害事象予測研究にも着手され、これらの取り組みも国内主要学会の数々の講演や米国UCCLA癌センター・泌尿器科の講義にご招聘される輝かしい栄誉へと結び付いております。他にも、公衆衛生学講座や放射線医学講座と共同での透析患者におけるコホート研究やがん治療効果に対する

画像評価研究などの幅広い研究もあり、先生のご指導により実に三十七名もの医学博士が誕生しております。

診療・教育面では、第一には、医局員の医療技術の向上に努められました。特に、手術においては医局員にはまず外科学総論や外科解剖学を身につけさせた上で、標準的な手術手技を教育・指導され、加えて、患者のQOLに直結する小児先天性疾患手術や尿路変更手術には高い技術精度を求められました。一方、泌尿器がん治療の基幹医療施設として先進医療の環境整備も推進され、進行性精巣腫瘍患者に対する多剤併用化学治療体制、自己血幹細胞移植、後腹膜リンパ節郭清術などの導入、確立による集学的治療はその一端と云えます。平成十六年には前立腺癌小線源治療を東北で初めて導入され、昨年二十五年には県内唯一のロボット支援体腔鏡下前立腺全摘除術を開始されて、前立腺癌治療の充実化も図られております。腎移植医療の推進にも情熱を傾けられ、献腎移植においては昼夜をいとわずに自ら提供施設へと赴き、方や生体腎移植では提供者の健康と安全を担保することを最優先されドナー腎摘出術を常に「ご執刀されました。また、県内の透析医療の普及にも労を惜しまられず、東日本大震災では岩手県と連携して透析難民の回避を主導し、この教訓をもとに、透析施設間ネットワークの構築や岩手県独自と

なる災害時透析医療対策室の常設に尽力されました。

先生は泌尿器外科手術のスペシャリストでもあり、尿道断裂修復術や腸管利用代用膀胱といった高度の手術テクニックを要する手術にも次々と着手されました。特に、泌尿器科領域で最も難易度の高い腎癌下大静脈内腫瘍栓手術は国内有数の症例数を誇り、中でも体外循環を用いた手術手技は、投稿された米国誌の「The Journal of Urology」や35th World Congress of the International College of Surgeons (平成十八年・タイ)の招請講演において大変好評を博されております。

このような先生の長年におけるご努力は、数々の学会、研究会の主宰に結び付いております。特に、故大堀先生に次いで二回目となる第九十八回日本泌尿器科学会総会(平成二十二年・盛岡市)の開催は、本講座の知名度をさらに高められ、同門会からも大変喜ばれました。また、他領域との交流もご活発で、泌尿器科医としては初めて第四十六回国際科学会日本支部総会(十一年・盛岡市)や第三十回日本画像医学学会(二十三年・東京都)を手掛けられております。一方、日本泌尿器科学会の求めに応じ、本講座小原航講師を事務局に膨大な労力を費やして、十九年および二十一年に腎癌診療ガイドライン第一版および第二版を監修され、さらにInternational

Journal of Urology にはガイドラインのレビューを掲載されておられ、腎癌研究・診療の第一人者としての確固たる地位を築き上げられたことは特筆すべきと存じます。学内では、腫瘍センター長(平成二十一年十月)、附属病院副院長(二十年四月)、高度看護研修センター長(二十三年七月)、学外では主なものとして日本泌尿器科学会理事(十五年四月)、日本泌尿器科雑誌臨床泌尿器科編集委員(十三年四月)をはじめ、日本癌治療学会や日本癌学会などの要職にも就かれ、正に故大堀先生曰く「馬車馬のごとく」ご奔走、ご活躍されました。

ご当地岩手ご出身の先生は、郷土の賢人官沢賢治をこよなく愛し、医療の理想郷であるオーダーメイド医療・個別化医療を彼のイーハトーブの言葉に託され、主催されたほとんどの学会のテーマとして引用されておられます。我々医局員は、今後もイーハトーブを求めさらなる努力を重ねてまいりたいと存じますので、先生にはこれからも変わらぬご指導をお願い申し上げます。最後に、交遊のございました方々ならびに同門会の皆様には今までのご厚情と多大なご支援に対しまして藤岡教授にかわり厚く御礼申し上げます。

(文責:丹治 進)



微生物学講座
感染症学・免疫学分野

教授 佐藤 成大

昭和四十四年の春、コックスの「イー・ジー・オール」のかけ声でオールを置くと、四十四田ダムの湖面は朝霧と静寂の中にありました。私は、岩手の大らかな自然に包み込まれ、飲み込まれました。以降、学生時代はボート部一筋の生活でした。

卒業年度、ポリクリで各科を廻っているときに、ウイルヒョーのリンパ節転移のある患者を診る機会に遭遇しました。回診の最後にいた私は、突然、患者にすがりつかれ、患者を正視することも、言葉をかけることもできませんでした。まだ二十代の若さだったと思います。胃がんの早期診断が一般化する前の時代でした。卒後は臨床を考

えていましたが、そんなとき「腫瘍ウイルス学」というのがあったらしい、ということを知りました。実は、既にウイルス学会の中心的存在となっており、腫瘍ウイルスの発見は一九七五年のノーベル医学・生理学賞に輝いていました。私は「これをやりたい」と

思い、細菌学講座の川名林治教授にご相談申し上げたところ、快く、ウイルス学の研究を始めることを許可して下さいました。さらに、当時の国立予防衛生研究所(現・国立感染症研究所)

に九ヶ月間も研修に出して下さいました。この研修は腫瘍ウイルス学のみならず、医学ウイルス学全般を知る上でたいへん有益な経験となり、私のスタートラインとなりました。川名教授は松本助教授と共に呼吸器ウイルスの研究を進めておられました。これが今日、大学での最終的な仕事となる「細胞培養によるインフルエンザワクチンの産生」につながるとは夢にも思っておりませんでした。ウイルス学の基本をご教授いただきましたことに、改めて感謝申し上げます。

最初の大仕事は、市内の病院で起きた単純ヘルペスウイルスの院内感染でした。まだDNAの抽出もままならない時期に、論文を読みながら、試薬作りを一から始め、岩手医大で制限酵素使用の第一号となり、ついに紫外線ランプの下でDNAのラダーが10株揃って同一のパターンで現れたときは、眼科の大学院生白井淳一君を呼んで喝采したものでした。

その後、一九八四年から八五年にかけて五ヶ月間、JICAの研究員としてケニアに赴任しました。そこでは、図らずも狂犬病、粟粒結核等の患者に遭遇し、途上国の悲惨な現状を知

り、「やはり現地に行かないと分からない」という認識を深く心に刻みました。そしてある程度技術的に自信ができた頃に、ジョン・ホプキンス大学の小児感染症科(R. H. Yolken 教授)に留学する機会を得ました。そこでは口タウウイルスの研究に進進しましたが(Nucleic Acid Res. 10113, 1989 他)、長引くことになり、大学を退職致しました。さらに、首都ワシントンD.C.にある米軍病理学研究所に職を得、助手と共にウイルス性心筋炎の研究を行いました(J. Gen. Virol. 75, 1994 他)。

結局、丸六年アメリカで暮らすことになりました。私事に渡って恐縮ですが、すべて妻のおかげです。

帰国後、大堀理事長・学長のご高配により、平成六年九月一日付で細菌学講座教授に昇任させていただきました。私が「AIDSの研究をするつもりでおります」と申し上げたところ、直ちに「P3実験室」を建設していただきました。その後も、幾度となく折に触れ、暖かく御指導・御鞭撻・御支援を賜りました。衷心より感謝申し上げます(次第であります)。

HIVの研究は高橋清実、Ton Sah Bandarが中心となり、インドネシア大学の支援を受け、尼国流行地のHIV分子疫学の仕事としてまとまりました(AIDS Res. Hum. Retroviruses 25, 2009, AIDS Res. Hum. Retroviruses 27, 2011)。分子疫学の土台となるゲノムシーケンズはコクサッキー

ウイルスB6で経験していました(加藤 さくら・岩手医誌 50, 1999)。

ところが、HIVの研究を始めていた頃、まさに青天の霹靂のごとく、平成八年九月「腸管出血性大腸菌O157」の流行が盛岡市内の小学校で発生し、岩手県の専門家検討会議に加わることになりました。実は、教授に就任するときに、細菌学の経験の浅い私は、密かに、このような事件を危惧しておりましたが、それが現実のものとなってしまった訳です。しかし、躊躇している暇はなく、直ちに、消化器外科の大学院生・中屋勉君とともに町へ飛び出し、糞便検体の収集を始め、増菌培養とPCRで志賀毒素stx1, stx2 遺伝子の検出を試み、結果を出すに至りました(安戸博・岩手医誌 50, 1998)。この仕事は社会的影響が大きいと考え、細菌検査技師の木村さん・中村さんの協力を得て、下痢症患者および食品従事者の検便について、一年間(一九九九〜二〇〇〇)通して、志賀毒素遺伝子の検出を試み、陽性の結果(5/1286)を得ました(Jap. Food Microbiol. 18, 2001)。また、堤玲子、下沖収がO157に対する血清診断法を試み疫学調査を行いました(Microbiol. Immunol. 48, 2004)。感染症学雑誌80, 2006)。この流行は、また細菌検査の精度と標準化の問題を提起したため、県にお願ひして「岩手感染症検査ネットワーク」を立ち上げていただき、以降、乳井さん・高橋幹夫

さんら細菌検査技師を中心に、毎年二回(夏冬)岩手県環境保健センターで講習会・実習を続けるに至っております。腸管出血性大腸菌の研究は高橋清実(J. Neuroinflammation 2008, 5)、小幡史子(J. Infect. Dis. 198, 2008)がペロ毒素の中枢神経系への影響に絞って、動物実験を行いました。高橋は所を得、現在、盛岡市保健所長を勤めております。小幡は米国に渡り自分のラボをもつに至っています。サクラ精機から派遣の浅岡伸太君と抗ペロ毒素抗体について熱く議論を戦わせたことを懐かしく思い出します。また、ポランティアとして一年間、教室のために尽くして下さった宮杜敦子さんに感謝いたします。

現在、院内感染の研究は講師の一人渡学が行っており、また、粘膜免疫の研究は吉野直人が行っております。いずれも、文科省の科研費で行われている仕事です。

私はといえば、二〇〇七〜二〇〇九年度の(独)科学技術振興機構(JST)研究費で「インフルエンザワクチン産生に適した3D高密度細胞培養法の研究」を遂行しました。これは、鶏卵ワクチンから培養細胞ワクチンへというコンセプトで行った、大きなプロジェクトでありました。研究員であった鈴木浩史は、こちらも所を得て、独立行政法人・医薬品医療機器総合機構に移り、世界を飛び回って活躍しているようです。東北化学薬品の峯

岸大輔君は、この培養細胞の遺伝子発現解析をおこない、三洋化成の黒川祐人君は培養法を研究し、それぞれ博士号を取得しました。このプロジェクトをやりきったところで、インドネシアの国有ワクチンメーカーBiofarma社と研究契約を結ぶ運びとなり、現在、WHOの基準に従い実用化に向け鋭意努力しているところであります。偶然のことから浮遊培養系を作りましたが、そこで取れた細胞がインフルエンザの高産生性を示し、しかも英国の世界的検定会社BioRelianceの検定を無事通過したときは、心の中で勝利を叫びました。まだまだ先の道のは長いのですが、ワクチンが世に出るときには、いささか成りとも大学に貢献できるものと期待しております。思えば、初めから無駄な事は一つなく、「運命」と思えるほど、それぞれの事象・研究が互いに影響し合っております。今日まで、私の研究を支えて下さった皆様様に改めて深甚なる謝意を表する次第であります。

最後になりますが、岩手医大の建学の精神である「誠の人間たれ」との教えを、研究の中において如何に体现すべきか、折に触れて考えて参りました。教育、研究、診療のいかなる分野にあるうとも、この精神を信奉する限り、岩手医大は永遠です。主陵会の益々のご発展と皆様のご健勝を祈念申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。



病理学講座
先進機能病理学分野

教授 澤井高志

岩手医科大学医学部病理学講座先進機能病理学分野 澤井高志先生は二〇一四年三月三十一日をもって定年退職されることになりました。

澤井先生は山形県鶴岡市のご出身で高校卒業まで過ごされました。鶴岡は藤沢周平の出身地として知られております。大学は東北大学医学部に入学し、一九七三年に卒業されました。学生時代から病理学教室に机を置いて勉強され、卒業するまでに一〇〇例近い病理解剖をおこなったということです。卒業後は、ご両親の希望もあって、公立気仙沼病院で二年間の外科の研修をされましたが、そのうち、東北大学医学部病理学第一講座の大学院に入学されました。大学院では諏訪紀夫教授のもとで器官病理学の研究をされ、肝硬変症の肝癌合併、非合併例の核、DNA計測に関する研究で学位をとられました。

その後、京極方久教授の時代には主にリウマチ・膠原病の病理の研究をされ、この分野の病理学ではトップレベルの研究を担うようになりました。厚生省の難病に関する研究班にも多く所属され、特に混合性結合組織病の難病指定の際には病理学的な解析で多大な貢献をされました。一九八八年から一九八九年には米国ニュージャージー州

立大学に留学し、当時の最先端の技術であった *in situ hybridization* を学ばれ、関節リウマチの滑膜組織でのマトリックスメタプロテアーゼ3のmRNAの発現を発表されました。その後も関節リウマチの骨破壊の機序を中心に研究をされました。帰国後は東北大学医学部附属病院病理部の副部長として、病院病理部での研究の重要性を説かれ、また、東北地方という医師の少ない地域柄から、遠隔医療の必要性にも早い時期から着目され、遠隔病理診断の実用化に向けて産官学の連携を強化されました。

その後、一九九七年八月に岩手医科大学医学部病理学第一講座(現・先進機能病理学分野)教授に着任されましたが、当時の理事長であられる大堀勉先生とは会津藩と庄内藩についての話題で意気投合されたとのことでした。岩手医大に移られてからは、医療情報部長、総合情報センター長、附属図書館長などの学内の役職を務められました。学生の学年担任になった際には担当した学生の指導に熱心に取り組まれました。

学外の活動としては、日本リウマチ学会で長年、理事を務められ、内科系医師と整形外科系医師との間の中立的

な立場で学会の方向性や情報化に尽力されましたが、その他にも日本病理学会理事、日本病理学会東北支部長、日本テレパソロジー・パーチャルマイクログスコピー研究会会長、日本臨床リウマチ学会理事、日本結合組織学会理事などを務められ、二〇〇四年に第三回日本テレパソロジー研究会、二〇〇七年に第十二回血管病理研究会、二〇〇九年には第八回東北国際保険研究会と第二十四回日本臨床リウマチ学会を盛岡市で主催されました。省庁関連では、経済産業省や総務省、厚生労働省の委員会などで数多くの委員を務められました。

研究面では、数多くの科研費の獲得、研究班の代表、班員としての参加など多くの実績がありますが、関節リウマチの骨破壊に関する研究では国内でもとより国際的な共同研究も行われ、数多くの大学院生が澤井先生のもとで研究をおこない、博士号を取得しました。遠隔医療やデジタルパソロジーの分野では厚生労働省、経済産業省、文部科学省、JAXAまで関わった、まさに最先端の技術の開発で重要な役割を果たし、遠隔病理診断の保険適用の実現に多大な貢献をされました。最近では、高速通信衛星「さずな」によるテレパソロジーの実験が、新聞、テレビ、電子ニュースにも全国レベルで数多くとりあげられております。また、学生の病理学実習にもバーチャルスライド形式を顕微鏡実習に代わる方法として採用し、自宅学習や教官との双方向式の教育の実用化も可能にしました。まさに岩手県をデジタルパソロジーの分野

で日本の最先端の場とした立役者でもあります。そういった、デジタル技術を駆使した研究もおこないながら、その一方で「エッセンシャル病理学」をはじめとした学生向けの教科書の執筆などにも労を惜しまず参加されました。

また、未踏波光の一つであるテラヘルツ波の医療応用に関する研究では西澤潤一先生との共同研究をされ、特許取得にも関わっておられます。その他にも岩手医科大学医師会理事、一般財団法人健康医療産業推進機構、理事長や公益財団法人インテリジェント・コスモス学術振興財団選考委員など、数多くの役職を務められております。

最近でも、関節リウマチの線維芽細胞様滑膜細胞(FLS)に関しての電子顕微鏡的な検討において、現在進行形での研究をされており、まだまだ学問に対する熱意は尽きません。先生の座右の銘は「継続は力なり」という言葉で、テレパソロジーや関節リウマチの研究にしても当初は地味なテーマでしたが、こつこつやるのが大事なんだと仰っております。

澤井先生は岩手医大の研究や教育に関して、厳しいことも多くされましたが、岩手医大の将来を人一倍、案じておられ、最近の凋落状態については、父兄も巻き込んで、学生、父兄、教官の三位一体となって努力していかねれば改善しないと仰っています。今、大学は移転事業の狭間の厳しい時期ではありますが、澤井先生には我々を引き続き叱咤激励していただければと思います。(文責:字月(木原)美和)



医歯薬総合研究所
超微形態科学研部部門

教授 遠山 稿二郎

「バイオイメージングセンター」

遠山先生は平成七年に共同研究部門電子顕微鏡室に助教として赴任され、平成十六年研究部門開設に伴い教授、平成十八年より改組に伴い初代センター長(電顕室から通算第六代目)として、これまで十七年間務められました。この間、電子顕微鏡の実用可能な最先端解析技術として、電子線トモグラフィ法、凍結超薄切・免疫電顕法、走査電子顕微鏡反射電子像による生物切片観察法などを定着すると共に、研究支援システムを確立し、国内外の研究者とも共同研究を行える技術集団の育成にご尽力なされました。

一方、先生は生物観察、野山歩き、スキー、写真などが趣味で、財団法人自然環境研究センター評議員、もりおか生物科学の集いの代表も務められ、自然の大切さを発信されてきました。その思いは三人の子供達の名前に「野歩、里」の一字が使われ、引き継がれております。

退職後もこれまでと同様に本センターへのご指導頂ければ幸いです。

(技師長 石田 欣二)

「動物研究センター」

遠山先生は平成十八年四月から平成二十三年三月まで動物実験センター長・動物研究センター長(第四代)を務められました。実際には、平成十七年より先代センター長の佐藤成大先生を補佐する形でセンター運営に直接関与されました。当時、「動物の愛護及び管理に関する法律」が平成十七年六月一日に改正施行され、動物実験を取り巻く環境が著しく変わりつつありました。そこで、獣医師である遠山先生は平成十七年に管理の行き届いていない歯学部A棟動物室の閉鎖、徒に長期飼育されている動物の殺処分を断行されました。そして、医学部三・四号館地下施設での実験動物の一元管理とセンター職員の技術向上に努められました。その結果、平成十八年より医学部五学年生全員を対象とする実験用ブタを用いた外科手術修得実習を可能にしました。さらに、平成二十一年には全国に先駆けて動物実験に関する外部検証を受検し、適正評価を得ました。これら以外にも、平成二十三年の矢巾キャンパス移転に関わる動物研究センターの設計にも深く関与されました。

今日、動物実験に関わる本学のソフトとハードの充実ぶりは全国的に知られていますが、遠山先生の貢献が非常に大きいと言えます。

(動物研究センター長 花木賢二)

「大学院生活を振り返って」

遠山先生に初めてお会いしたのは、当時私が勤務しておりました岡山大学に新型の電子顕微鏡を見学に来られた時でした。このご縁がきっかけで、私はその後、先生のお口添えにより現在勤務しております理化学研究所へ移ることとなりました。以来十五年以上にわたり、先生には公私において大変お世話になりました。また、二〇〇四年からの四年間は社会人大学院生としてご指導を頂きました。先生には以前より電子顕微鏡解析についてご指導、ご助言を頂いておりましたが、大学院の四年間では、さらに先生の研究に対する熱意や深い考察力、柔軟で豊かな発想力に触れることが出来、多くの事を学ばせて頂きました。また、社会人大学院生ということで、先生はじめバイオイメージングセンターのスタッフの皆様にも色々とお気遣い頂き、楽しく充実した大学院生活を送ることが出来ました。なかでも、週末や休暇を利用しての泊まり込みの実験では、連日深夜まで研究の話に留まらず、色々な話題について談議させて頂きました。これは貴重な経験となりました。時には厳しい意見やお叱りも頂戴しました

が、常に建設的な意見でフォローして頂いたことを今も懐かしく思い出します。先生が退職されるとは寂しい限りですが、これからも先生の教えを忘れず日々精進して行きたいと思っております。最後になりましたが、これまでのご指導とお心遣いに深く感謝致しますとともに、今後も溢れんばかりの知的好奇心とバイタリティーで活躍されまますことをお祈り申し上げます。(理化学研究所)

脳科学総合研究センター 赤木 巧

「盛岡での三十年余」

昭和五十三年三月十五日、春の気配も感じられない盛岡に赴任し、岩手医大での生活が始まりました。以来、三十年以上にわたり本学にお世話になりました。この間、スタッフの協力のものと、キラッと輝く技術を持った技術者集団を目指し予想以上の成果を得ることができたと自負しております。研究面では、グリア細胞をキーワードに、多方面の方々と共同研究を実現することができました。この間、主陵会からは、留学に際する支援、共同研究補助を頂き大変助かりました。この場をお借りして感謝申し上げます。また、無事、任を終えるに当たり、これまでにお世話になった皆様方に改めて感謝すると共に、本会のみならずご発展を祈念致します。(遠山 稿二郎)



新年のご挨拶

岩手医科大学
理事長・学長

小川 彰

新年、明けましておめでとうございます。主陵会の皆様には、ご健勝で新年を迎えられましたこと、誠にめでたく心よりお慶び申し上げます。

さて、母校もここ数年間おめでたいことが続きます。第一には、岩手医科大学の創立年が明らかに、私立岩手病院・岩手医学講習所が設立されたのが明治三十年（一八九七年）であるという資料が発見されました。この時代は、野口英世が学んだ「済生学舎」など医師養成の私塾が東京に数校しかなかった時代です。また、日本で二番目の京都帝国大学が創立された年でもあり、同じ時期に地方岩手に医療人養成機関を発足させた三田俊次郎先生の先見性に敬意を表したいと思います。本学の創立年を明治三十年に変更すること、昨年主陵会総会でご提案申し上げました。その後、賛同のご意見が相次いでおり、今年の総会で改めてご承諾を頂きたいと思っております。そうしますと三年後の二〇一七年（平成二十九年）には創立一二〇周年を迎える事

になり、盛大にお祝いをしたいと考えております。また、来年二〇一五年（平成二十七年）は、歯学部創立五十周年に当たります。開設当時の岩手医科大学歯学部は全国の国公私立の歯学部が羨む歯学部でした。現在、ハーバード大学との連携による歯学部改革が行われており、その進捗とも連動しますが、本学歯学部の将来が明るいものであれば、歯学部創立五十周年も大いにお祝いしたいと思います。

第二には、新病院新築移転がいよいよ本格的になる年となります。二〇一八年（平成三十年）春には、内丸メディカルセンターの運用開始、二〇一九年（平成三十一年）春には矢巾キャンパスの本院大病院の運用を開始しなければなりません。そのためには、今年中に設計が完了しなければなりません。もう

待ったなしのタイムスケジュールです。内丸メディカルセンターは現在の歯学部B棟とPET・リニアックセンターとを繋いでL字型に建築されます。病棟管理棟として現在の循環器医療センターと空中回廊で繋いで使用す

る予定です。B棟の裏にある日赤岩手県支部は本学に譲渡される事が決まっております。これにより、来年にはB棟と日赤岩手県支部の建物の解体が始まり、解体後直ちに建築が始まります。

また、矢巾キャンパスの本院のためのエネルギーセンターは再生可能エネルギー・基幹病院緊急エネルギー事業として経産省から約十億円の補助を受け、先行して一部を今年着工の予定です。この様に、本学発足の歴史の中で最大の事業である新病院建築は着々と実行に移されつつあります。

新病院には、今の病院機能をそのまま移すつもりはありません。日本一、東洋一、そして世界と競争できる新病院を目指しています。地方にありながらも、世界と対等に渡り合える大学を目指し、新キャンパスと新病院の整備を目指します。母校岩手医科大学の将来のため同窓会・主陵会の皆様のご支援をお願いし、年頭のご挨拶とさせていただきます。